

起こらなかつた奇跡

小田 幸子

俊徳丸は、何のために春の彼岸中日に天王

寺西門石の鳥居にやってきたのだろう。「日想観を拜む」ことによつて、盲目の目が再び

開くことを願っていたのではなからうか。も

ちろん、そんなことは本文にはつきりと書か

れているわけではない。口に出すのははばか

られる、とうてい叶いそうもない願望だから

だ。それでも、彼の言葉のはしやしや言動か

ら、心の奥に秘めた願いが顔をのぞかせる。

『観無量寿経』によると、阿弥陀仏や極楽の

姿を思い描くために十六種の方法があり、そ

の第一番目に相当するのが「日想観」である。

そこから、太陽が真東から昇り真西に沈む春

分・秋分の日、落日をみることによつて西方

極楽浄土往生を願う風習が生まれたという。

「極楽浄土の東門は 難波の海にぞ対へたる

「転法輪所の西門に 念仏する人参れとて」

〔梁塵秘抄〕一七六番の今様からも知られる

ように、彼岸の中日にあたるこの日、天王寺

西門において、此岸から彼岸へと道が開かれ

る。西方極楽浄土の「東門に向かふ難波の西

の海」に日輪が舞うように没する時、聖なる空間と聖なる時間が重なるのだ。

能(弱法師)は、日想観の時刻を頂点に置く。

前半の展開は、このクライマックスに向かっ

て俊徳丸が心のうちで希望をふくらませてい

く過程である。それはまた、自然界の春の光

と仏法の慈悲とも重なり、難波の浦の情景全

体が光にあふれた仏国土のごとく変容するな

かで、俊徳丸は「目が見える」と感じる。その

過程をかいつまんでみていこう(本文は、岩

波日本古典文学体系『謡曲集上』所収の世阿弥

自筆本転写本による)。

登場場面で俊徳丸は、深い暗闇と孤独に閉

ざされている(出で入りの、月を見ざれば明

け暮れの、夜の境をえぞ知らぬ。難波の海の

底ひなき、心のほどを人や知る)。けれども、

この境遇を「もう、仕方がないのだ」とあきら

めたわけではない(よしや世とも、思ひも捨て

ぬ心かな)。自己紹介の後に置かれたエピソード

は、「玄宗皇帝の御持僧だった一行阿闍梨が、

楊貴妃との関係を噂されて流罪とな

り、七日七夜暗闇が続く暗穴道をたどっていた。天は無実の罪を憐れみ、九曜の光を現して阿闍梨を守った」(『平家物語』巻二より)との説話に基づく。俊徳丸は一行阿闍梨に自らの境遇を重ね、無実の罪で放浪する盲目のわが身も、この天王寺で仏の光明にあずかるに違いない(暗闇に光が射す)と期待を込めているのだろう。

施行の段は、梅花が衣に散りかかつて香りを放つ、のどかな春の情景が描かれる。草木

国土まで仏法の恵みを受け、盲目のわたしに

も、梅の花が見えるようだ(「盲亀のわれらま

で、見るここちする梅が枝のこと俊徳丸は述

べる。春の光に照らされ、仏法への期待はい

よいよ高まる(「難波の法によも洩れじ」。続

いて、天王寺の縁起を述べる(クリ・サシ・

クセ)となる。世阿弥作になるこの「天王寺曲

舞」を、香西精氏は「弱法師が喜捨を求めた

めの芸として演ずる舞または歌」と解釈した

(『能謡新考』所収「弱法師について」。小考で

は香西説とは別に、冒頭から積み重ねてきた

「仏法最初の寺天王寺」に対する主人公の期待

と賛嘆を集約する役割を担うとみておきた

い。「クセ」末尾を「おしる海山も、皆成仏

の姿なり」と結ぶように、日没を迎えた難波

の浦の情景は、すでに日常を越えた仏国土に

近づいている。

待ちわびた日想観の時を訪れる。人々が日

待ちわびた日想観の時を訪れる。人々が日

没を拝しながら目に見えない極楽浄土を思い浮かべると同様、俊徳丸も見えない景色を見ようとす。「あら面白や尊やな」以下、盲目の身ながら通力によって山河大地を見た人の例をあげ、さらにかつて馴染んだ景色を脳裏に呼び起こして、日没の光に照らされた今の情景と重ね合わせ、「淡路絵島須磨明石、紀の海までも見えたり見えたり」と遙かに見渡し、「おう、見るぞとよ見るぞとよ」と昂揚して歩き回る。しかし、眼はあかなかつた。人に突き当たり、ころび、笑われて、「盲目の悲しさ」を思い知らされる。

以上のように、暗闇と深い悲しみから開始した物語は、春の日の光が加わり、日光にもたとえられる仏法慈悲が加わり、次第に明るさを増していく。繰り返しになるが、これは、主人公が盲目の状態から開眼へ向けて、みずから心を励まし、希望をふくらませていく過程でもあった。そして、クライマックスへ向けてひたすら進んでいった願望は、頂点に達したところで打ち砕かれる。「目が見える」と感じた俊徳丸の内的世界と、外的世界(現実)は一致しない。

〈弱法師〉は、当時の現実社会を踏まえた劇すなわち現代劇として描かれているが、すでに指摘されているように、素材とした物語は、「クナラ太子説話」(日本に入ったものとして『今昔物語集』巻四第四話や『三國伝記』など

にみえる)と称する天竺仏教説話に由来する。「クナラ太子説話」をはじめ、その流れを汲む中世の説教『しんとく丸』や、時代は下るが浄瑠璃撰州合邦ケ辻』では、いずれも盲目の主人公は開眼を果たす。「継母の讒言(あるいは呪詛)・追放・盲目・恋人との放浪・父との再会」のプロットを共有するクナラ太子説話系統の作品において「盲人が開眼する奇跡は外すことができない根幹であったことがうかがえる。ところが、ほぼ同一のプロットを持つ〈弱法師〉の俊徳丸は開眼しない。能以前にそのような形の説話があったわけではなく、作者・元雅による説話の改変とみてよい。ここには、〈弱法師〉を「現実の物語」として描こうとした元雅の意図が端的に現れている。

作者は冒頭で「人の讒言によって、勘当され、盲目となった」と少ない情報を与えるだけで、その内実には踏み込まず、数々の不幸と悲しみを背負った主人公の心の世界にスポットを当てた。物語を大胆に捨ててしまったのである。これは歌舞を演技主体とする能ならではの方法であり、説話の枠から離れた自由な展開を可能にする方法でもあった。

俊徳丸の眼がひらかないのは、同人作(隅田川)の結末と共通する。尋ね人に再会してハッピーエンドを迎える物狂能の定石は、たとえてみれば「二人は結婚していつまでも幸せに暮らしました」で終わるおとぎ話に似て、

これまでの苦悩のすべては「再会」によって解決し、物語は打ち切られる。それに対して(隅田川)は、尋ねる子の死という非情な現実と、子の亡霊とのつかの間の再会を結末に置いた。(弱法師)も同じだ。どんなに心を込めて祈ったところで眼はあかない現実を突きつけられた主人公は、激しく打ちのめされる。その後父と子は再会して家に帰ることとなるわけだが、この場合の再会は物狂能の定石のハッピーエンドでも解決でもない。亡霊との再会によって(隅田川)の母親の絶望がさらに深まったかもしれないように、「親ながら恥づかしくて、あらぬかたに逃げ」た俊徳丸にとって、父との再会が単純に苦しみからの解放につながることは考えられない。俊徳丸は家に戻って、はたして幸せになれるだろうか？劇が終わっても、観客は安堵できず、物語は閉じないのである。おそらくこの結末を受けて、「その後の俊徳丸物語」を書いたのだ。

元雅は、人間の切実な願望と、それを裏切る過酷な現実を鋭く対立させることによって、現代にそのまま通じる劇を作り上げた。俊徳丸は説話の登場人物を越えた生身の個人として、われわれの心を撃つのである。

(日本大学芸術学部講師)